様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 10 日現在

機関番号：12601
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2012
課題番号：22520657
研究課題名（和文）　中世書状史料論の試み

研究課題名（英文） The trial of the historical source research on a medieval-times letter

研究代表者
末柄　豊（SUEGARA YUTAKA）
東京大学・史料編纂所・准教授
研究者番号：70251478

研究成果の概要（和文）：
本研究は、多様な中世文書のなかにあって、史料として利用することが相対的に困難な書状および仮名消息について、史料として活用するための基盤を形成することを目的とした。文書群・史料群あるいは特定の人物の書状に注目することで、書状の史料としての活用の可能性を示すのと同時に、書状読解の道具や教材を作成することで、今後における活用を促した。

研究成果の概要（英文）：
This research aimed at forming the base for utilizing as historical sources about letters and the letters of the Japanese syllabary. These are because it is relatively difficult to utilize as historical sources also in various documents of medieval times. It was shown clearly that a letter is very useful as historical sources by taking the method of observing the letter of a document group or a specific person. Practical use of the letter in future research was urged by creating the tool and teaching materials for reading and comprehending a letter with it.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
2012 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・日本史
キーワード：中世史、史料論

１．研究開始当初の背景

中世文書についての史料学的な研究は、近年多くの成果が積み重ねられているが、その大半は権力者の発給する公文書、あるいは売買等の契約に関する証文を対象としたものである。

私人間の互通文書たることを基本とする書状は、大量に残存しているにもかかわらず、注目されているとはいいがたい。また、公文書においても仮名で記された女房奉書については、研究の対象となることが少ない。

そして、このような傾向が生じる理由としては、個々の文書の内容が断片的であり、記述に省略の多いこと、判読が困難であり相対

的に活字化が遅れていること、などが挙げられよう。
　かかる状況こそ、本研究を申請する動機となったものである。

２．研究の目的
　本研究の目的を一言で述べれば、多様な中世文書のなかにあって、史料として利用することが相対的に困難な書状および仮名消息について、史料として活用するための基盤を形成することにある。

　書状あるいは女房奉書を含む仮名消息は、単独では必ずしも豊富な情報を有していないが、文書群ないしは史料群（同一の伝来を有する日記などを含むまとまり）のなかで捉え直すと史料としての有用性が発揮される場合が少なくない。
　また、同一人物の書状を広く収集すると、他の記録や典籍からは窺い知れない人的交流の様相が明らかになるなど、伝記史料としても活用できる。
　すなわち、書状および仮名消息について史料としての有用性を発揮させるためには、公文書類や証文類に比してより多くの手間をかけることが必要なのである。
　ここでいう手間とは、基礎的な研究と言い換え得るが、書状および仮名消息に関する基礎的な研究の蓄積・共有はきわめて不十分なのが現状だといえる。
　本研究は、この基礎的な研究をすすめることで書状類の史料としての活用を促し、中世文書の史料としての可能性を高めることにつなげるものである。

３．研究の方法
（１）禁裏（天皇家）・三条西家・山科家および興福寺などの旧蔵にかかる室町時代中後期の書状・仮名消息（女房奉書も含む）を主要な素材として、文書群・史料群への注目、特定の人物の書状への注目という両様のアプローチにより、書状を史料として活用する方法論を鍛えると同時に、その可能性を提示する。

（２）書状なかんづく女房奉書に代表される仮名消息の読解のための自習教材というべきものを作成・公開することで、書状の史料としての利用を広く促す。

４．研究成果
　本研究による主要な研究成果は以下のとおりである。

（１）東京大学史料編纂所所蔵『実隆公記』の原本について、日記中に貼り込まれた書状および紙背文書として残された書状の差出人の署名・花押の集成作業をすすめた。そのうち、俗人男性について整理のうえ、報告書『実隆公記紙背文書花押署名総覧（公家武家編）』（東京大学史料編纂所研究成果報告2012-8）を刊行した。この報告書は、厖大な分量が残されている三条西実隆・公条父子の書写にかかる書物の紙背文書を活用するために大きな手がかりを提供することになる。実隆・公条父子の書写にかかる書物は、ひとり歴史研究のみならず、文学研究でも重要な位置を占める本が含まれており、その波及効果は小さくない。

（２）仮名消息を読解するための自習教材を作成し、末柄のホームページ（http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/personal/suegara/shojo_kaken）において公開した。具体的な素材としては、東京大学史料編纂所所蔵の実隆公記に貼り込まれた書状および紙背文書として残された書状紙背文書のなかから後土御門天皇女房奉書５通を取り上げた。これは、女房奉書の読解の教材としては、これまで公開されているものでは、最もまとまっており、有用なものだと考えている。

（３）禁裏文書（京都御所東山御文庫所蔵文書など）や三条西家旧蔵の書状・消息類の読解・分析をすすめ、寺門派の脇門跡花頂門跡に関する実態の解明をはたして論文「花頂門跡再考」にまとめた。

（４）禁裏文書（北白川宮旧蔵手鑑など）や三条西家旧蔵の書状・消息類の読解・分析をすすめ、室町時代における天皇と室町殿との関係のありようを検討し、学会報告を行うとともに、論文「禁裏文書にみる室町幕府と朝廷」にまとめた。

（５）宮内庁書陵部所蔵桂宮本『一条冬良消息』などの読解・分析をすすめ、土佐一条家の候人であった中御門家の系譜を追究して論文「土佐一条家祗候の中御門家の系譜をめぐって」にまとめた。

（６）主として東京大学史料編纂所架蔵の複本類によって、洞院実熙や甘露寺親長の書状の収集につとめた。特に実熙については、宮内庁書陵部所蔵桂宮本『洞院実熙消息』全点の翻刻をおこなった。そのうえで、後花園天皇と実熙との関係について笙の秘曲伝授の観点から仔細に検討を加え、論文「「十三絃道の御文書」のゆくえ」にまとめた。

（７）宮内庁書陵部所蔵『言国卿記』の紙背

文書について読解・分析をすすめ、室町時代後期における楽人の所領や、貴族と地方の武士との通婚について検討をおこなった。

（８）勧修寺・大覚寺・鹿王院・陽明文庫（以上、いずれも京都市）、鳥取市歴史博物館等に出張し、中世史料の調査をすすめた。そのうち、大覚寺所蔵『真恵置文写』や勧修寺所蔵『慈尊院古聖教目録』などについては史料紹介をおこない、ほかにも、論文「禁裏文書にみる室町幕府と朝廷」のなかで陽明文庫所蔵『陽波』を利用した。

以上（３）～（６）によって、書状および仮名消息（女房奉書を含む）の史料としての有用なことを示し得たのと同時に、その利用法についてのモデルを提示し得たとも考えている。

また、書状を史料として活用するための道具というべきものを作成した（１）は、それ自体の活用とともに、同種の道具の作成を促すことにつながり、今後の書状の活用のための方法論の提示という側面も併せ持っているといえるだろう。

さらに、（２）は仮名消息に対する読解に向けての最初のとっかかりを提供するものであり、仮名消息の史料としての有用性の提示と相俟って、仮名消息に対する関心さらには活用の機運を高めることに貢献できるものと考えている。

なお、（７）による具体的な研究成果についても、2013 年度以後に公表することを予定している。

また、（６）において全点の翻刻を行った『洞院実熙消息』についても、今後機会を得て全体を紹介したいと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 11 件）
①末柄　豊、治部卿入道寿官、日本歴史、査読あり、776 号、2013 年、107～115 頁

②末柄　豊、「十三絃道の御文書」のゆくえ、日本音楽史研究、査読あり、8 号、2012 年、1～12 頁

③末柄　豊、『看聞日記』、歴史と地理、査読なし、238 号、2012 年、29～34 頁

④末柄　豊、慈尊院古聖教目録二種、勧修寺論輯、査読なし、8 号、2012 年、5～35 頁

⑤末柄　豊、土佐一条家祗候の中御門家の系譜をめぐって、ぶい&ぶい、査読なし、23 号、2012 年、1～11 頁

⑥末柄　豊、禁裏文書にみる室町幕府と朝廷、ヒストリア、査読あり、230 号、2012 年、95～121 頁

⑦末柄　豊、大覚寺所蔵『勧修寺慈尊院私抄目録』、室町時代研究、査読なし、3 号、2011 年、85～100 頁

⑧末柄　豊、大覚寺所蔵『真恵置文写』、室町時代研究、査読なし、3 号、2011 年、130～140 頁

⑨末柄　豊、花頂門跡再考、室町時代研究、査読なし、3 号、2011 年、213～301 頁

⑩末柄　豊、大永五年に完成した将軍御所の所在地に関する覚え書―洛中洛外図屏風歴博甲本の研究のために―、東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信、査読なし、54 号、10～15 頁

⑪末柄　豊、足利義稙の源氏長者就任、日本歴史、査読あり、748 号、87～95 頁

〔学会発表〕（計 1 件）
①末柄　豊、禁裏文書に見る室町幕府と朝廷、大阪歴史学会大会・中世史部会、2011 年 6 月、於神戸大学

〔図書〕（計 5 件）
①末柄　豊、実隆公記紙背文書花押署名総覧（公家武家編）、東京大学史料編纂所研究成果報告 2012-8、2013 年、全 40 頁

②上島　享・末柄　豊・前川祐一郎・安田次郎、福智院家文書　第三〈史料纂集 古文書編 46〉、八木書店、2012 年、全 264 頁

③末柄　豊、京都御所東山御文庫所蔵延暦寺文書〈史料纂集 古文書編 45〉、八木書店、2012 年、全 286 頁

④末柄　豊、『親長卿記』―戦国時代の朝廷を導く―、元木泰雄・松薗斉編『日記で読む日本中世史』、ミネルヴァ書房、2011 年、199～216 頁

⑤末柄　豊、細川幽斎と武家故実、森正人・鈴木元編『細川幽斎―戦塵の中の学芸―』、笠間書院、2010 年、171～188 頁

〔その他〕
ホームページ等
http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/personal/su

egara/shojo_kaken

６．研究組織
(1)研究代表者
末柄　豊　(SUEGARA YUTAKA)
東京大学・史料編纂所・准教授
研究者番号：70251478

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし